

[成果情報名] イチゴ「恋みのり」における定植前液肥施用による心止まり低減効果  
[要約] イチゴ「恋みのり」の育苗において、定植直前に液肥を施用すると、施用しない場合よりも心止まり株の発生を軽減でき、収量が増加する。  
[キーワード] イチゴ、恋みのり、育苗期、施肥、心止まり  
[担当] 長崎県農林技術開発センター・農産園芸研究部門・野菜研究室  
[連絡先] (代表) 0957-26-3330  
[区分] 施設野菜  
[分類] 普及  
[作成年度] 2025 年度

#### [背景・ねらい]

九州沖縄農業研究センターで育成された「恋みのり」は 2017 年から本県で試作導入され、2022 年度には 84.6ha (シェア 42%) まで作付面積を伸ばしている。しかし、本県では生育途中に肥料切れが原因で生長点の生育が停止する「心止まり株」の発生による減収が問題となっており、対策が求められている。

そこで、育苗期における定植直前の液肥の施用が、心止まり株の発生と収量に及ぼす影響を明らかにする。

#### [成果の内容・特徴]

「恋みのり」の育苗において、定植直前に液肥を施用すると、

1. 慣行の施肥体系と同等の開花日となる (表 1)。
2. 慣行の施肥体系より芽数が増え、心止まり株の発生が減少し、2 月以降の収量が増加する (表 1、図 1)。
3. 慣行の施肥体系より販売額の増加が見込まれる (表 2)。

#### [成果の活用面・留意点]

1. 「恋みのり」の育苗管理に活用できる。
2. 雨よけ高設育苗における試験結果である。
3. 定植直前の液肥は、花芽分化を確認した後に施用する。

#### [耕種概要]

(供試品種) 「恋みのり」

(育苗) 育苗方法: 雨よけ高設育苗 切り離し日: 2022 年 6 月 28 日、2023 年 6 月 20 日、2024 年 6 月 20 日

(本圃) 定植日: 2022 年 9 月 20 日、2023 年 9 月 19 日、2024 年 9 月 30 日

栽培方式: 地床栽培 栽植距離: 株間 25cm 2 条千鳥植え (560 株/a)

(収穫期間) 2022 年 11 月~2023 年 5 月 15 日、2023 年 11 月~2024 年 5 月 15 日、2024 年 12 月~2025 年 5 月 15 日

(試験規模) 1 区 5 株 4 反復

#### 試験区の構成

区	施肥日・窒素施肥量(N-mg/株)			液肥 <sup>u</sup> 定植日	総窒素 施肥量 (N-mg/株)
	緩効性肥料				
	6 月下旬 <sup>z</sup>	7 月上旬 <sup>y</sup>	7 月下旬 <sup>x</sup>		
慣行+液肥 <sup>w</sup>	140	60	60	16.5	276.5
慣行 <sup>v</sup>	140	60	60		260

z 6 月下旬: 2022 年は 6 月 29 日 2023、2024 年は 6 月 20 日

y 7 月上旬: 2022 年は 7 月 6 日 2023、2024 年は 7 月 10 日

x 7 月下旬: 2022 年は 8 月 5 日 2023、2024 年は 7 月 31 日

w 6 月下旬の緩効性肥料はジャンプ P7、7 月上旬および 7 月下旬の緩効性肥料はジャンプ P25、液肥はキッポ青

v 6 月下旬の緩効性肥料はジャンプ P7、7 月上旬および 7 月下旬の緩効性肥料はジャンプ P25

u 液肥はキッポ青を 300 倍希釈で株あたり 100ml を育苗ポットにかん注

[具体的データ]

表1 定植直前の液肥施用による頂花房開花日、収穫開始日、芽数、心止まり株発生率

年次	区	頂花房		第1次腋花房	芽数		心止まり株発生率 (%)
		開花日 (月/日)	収穫開始日 (月/日)	収穫開始日 (月/日)	11月上旬 (芽)	4月上旬 (芽)	
2022	慣行+液肥	11/8±1 <sup>y</sup>	12/5±2	1/20±9	1.5	2.5	0
	慣行	11/6±1	12/3±2	1/13±10	1.2	1.6	15
	有意差 <sup>z</sup>				n. s.	*	
2023	慣行+液肥	11/7±5	12/7±7	2/1±9	1.2	2.7	0
	慣行	11/6±1	12/7±2	2/4±9	1.0	2.1	10
	有意差				n. s.	n. s.	
2024	慣行+液肥	11/14±1	12/14±3	2/11±12	1.4	2.8	0
	慣行	11/16±1	12/21±3	2/10±9	1.4	2.7	5
	有意差				n. s.	n. s.	

z t 検定により\*は5%水準で有意差あり、n. s. は有意差なし  
y ±は95%信頼区間の幅

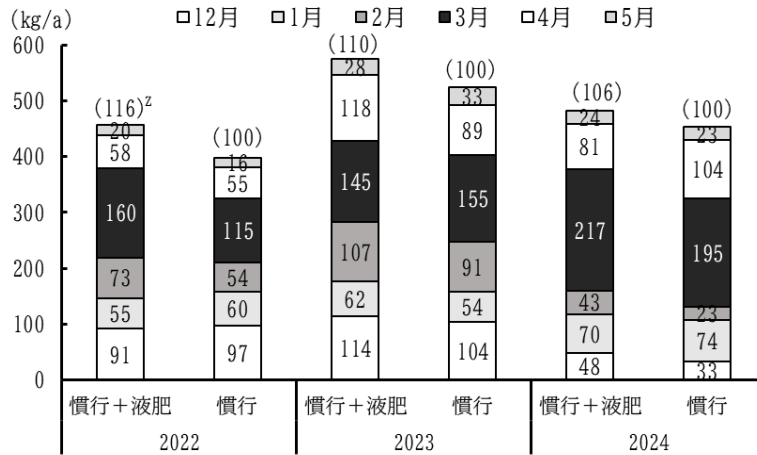


図1 定植直前の液肥施用による月別商品果収量

z ( )内数字は慣行を100とした場合の割合

表2 販売額試算

年次	区	販売額 <sup>z</sup> (千円/a)	慣行との差 (千円/a)
2022	慣行+液肥	623	69
	慣行	555	
2023	慣行+液肥	848	70
	慣行	778	
2024	慣行+液肥	693	74
	慣行	619	

z 販売額は全農長崎県本部実績の当該年度の月別単価と試験区の月別商品果収量を乗じて計算

[その他]

研究課題名：いちごの輸出拡大を図るための大規模安定生産技術の開発

予算区分：外部（戦略的スマート農業技術等の開発・改良）

研究期間：2022～2024年度

研究担当者：堀田修平